

# ヒルゲンドルフと神奈川県

## “日本の魚学・水産学事始め—フランツ・ヒルゲンドルフ展—”によせて

矢島道子 (東京成徳学園短期大学・高等学校)

### ヒルゲンドルフ展前話

1994年の夏のある晩、もう真夜中に近い頃、私は、ベルリンのフンボルト大学自然史博物館の前で、立ちすくんでいました。この大きな建物の中に、小さな小さなウミホタル（カイミジンコのなかま）の模式標本があるはずのだけれどと思っていました。私は、化石カイミジンコの分類学的研究を行っていますので、模式標本はどうしても見たいと思っていました。ウミホタルはドイツ人お雇い教師のフランツ・ヒルゲンドルフ(1839-1904)が日本で採集し、ドイツで最初に研究されて、ヒルゲンドルフの名前が学名についています。

その冬、縁があって、ベルリンの自然

史博物館の中に入ることができました。そこで、私は、ウミホタルではなく、ヒルゲンドルフの集めた膨大な魚のコレクションを見つけました。ヒルゲンドルフが日本滞在時(明治6-9年)の手紙も見ました。彼宛の日本語の手紙はあまりにも達筆で、私には読めませんでした。明治13年に行われた万国漁業博覧会に出品された、日本の魚の乾燥標本が100年以上たった現在でも、そのままの姿で保管されていました。ヒルゲンドルフと日本の先人たちの苦勞と努力によって、日本が世界の漁業国になっていったことをこの標本は物語っていました。これは私一人ではなく、日本中の人に見てもらいたいと思いました。



写真2. ヒルゲンドルフ. 写真提供: ドイツ日本研究所.

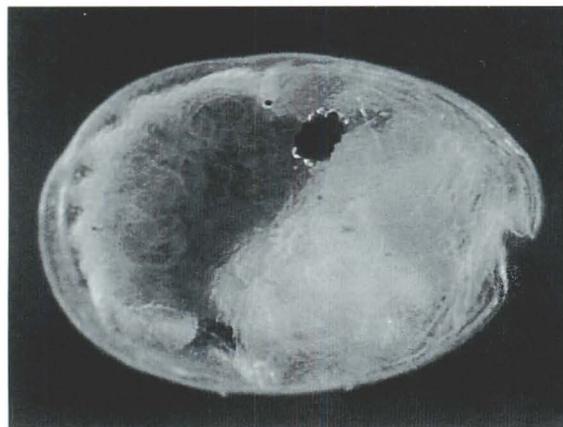


写真1. ウミホタル. 写真提供: 阿部勝巳氏.

### ヒルゲンドルフは日本最初の生物の先生

ヒルゲンドルフのことは、日本でも本国ドイツでもほとんど知られていません。ヒルゲンドルフは東京医学校(東京大学医学部の前身)の博物学(生物学)の先生として来日しました。調べていくと、森鷗外が東京医学校の学生で、ヒルゲンドルフ

の講義を聴いていたことがわかりました。そのノートによれば、ヒルゲンドルフは進化論の講義をしていました。大森貝塚で有名なモースの講義よりも3年前のことでした。講義の中で、「キュビエは進化論の敵、ジョフロワ・サンチレールは古い進化論、ダーウィンは新しい進化論」といっています。また、進化の証拠として、現在の生物の教科書に載っているような「相同の事実や、生物地理的証拠や、個体発生

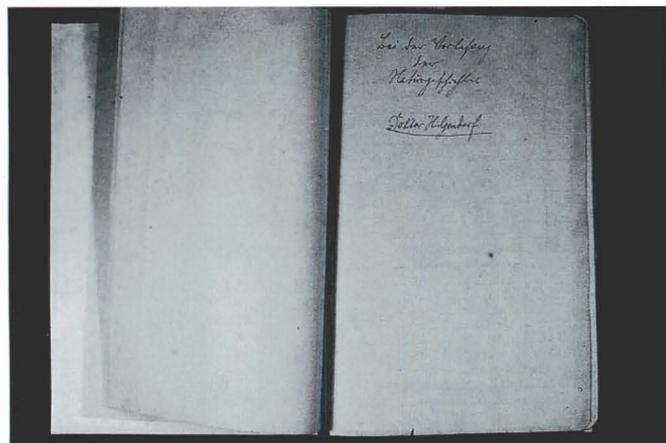


写真3. 森鷗外の講義ノートより, 「ヒルゲンドルフの博物学」. 文京区立鷗外記念本郷図書館蔵.

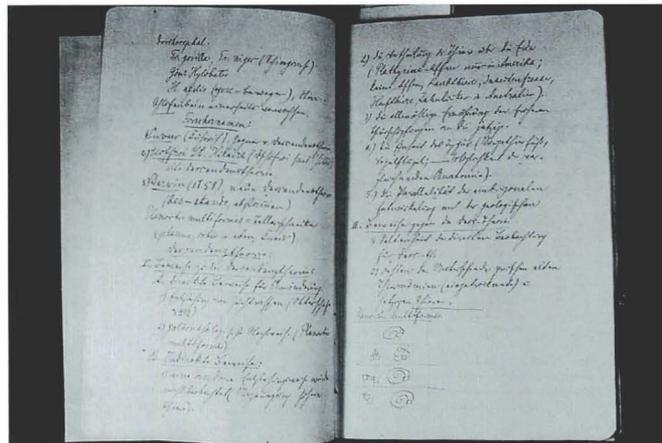


写真4. 森鷗外の講義ノートより, 進化論の講義. 文京区立鷗外記念本郷図書館蔵.

は系統発生を繰り返すというヘッケルの学説」を紹介しています。ヒルゲンドルフは化石巻貝の進化的研究で学位をとっており、進化論は彼の研究人生の真髄でした。ヒルゲンドルフの研究はダーウィンの『種の起源』第6版で引用されてもいるのです。

### ヒルゲンドルフには横浜も研究活動の舞台でした

ヒルゲンドルフは現東京大学構内にあったお雇い外国人屋敷に住みましたが、横浜でも活発に活動しました。その当時日本にいたドイツ系外国人はドイツ東亜博物学民族学協会(OAG、現ドイツ東洋文化研究協会)を作り、東京と横浜で会合を開き、さまざまな情報を交換しました。会合の後には、横浜のゲルマニア亭でパーティを催しました。ヒルゲンドルフは書記(後に副会長)としてその運営にあたりると同時に、日本の生物、地学その他多くの発見や研究を発表しました。ヒルゲンドルフはベルリン大学で学業を修めたので、その当時のヨーロッパの最高の学問を背負っていたのです。

### 何でも研究したヒルゲンドルフ

ヒルゲンドルフの研究対象は、ドイツにいるときから興味を持っていた魚が一番多いのですが、何にでも興味を持ちました。これは当時の生物学が自然史(博物学)の長い伝統の上にあったためです。植物、原生動物、海綿動物、腔腸動物、外肛動物、軟体動物、星口動物、節足動物、脊椎動物等、すべての分類群にわたっています。大きな動物はすべて解剖して調べました。たとえば、富士の裾野から連れてこられて、横浜で見せ物になっていたニホン

カモシカを手に入れ、それが死ぬと、ヒルゲンドルフは解剖しました。その結果、シベリヤやインドに見られるカモシカとは全く異なる」と報告しています。

### 江ノ島で発見したオキナエビス

ヒルゲンドルフは講義の合間には、日本各地を旅行し、魚類や多くの生物を採集し分類学的研究に励みました。江ノ島のおみやげ屋でオキナエビスをみつけ、ドイツに帰ってから、新種として報告しました。古生代の化石に見られる形態的特徴を持っているため、オキナエビスを「生きている化石」と呼びました。ちなみに「生きている化石」という言葉は、ダーウィンの『種の起源』で初めて使われたものです。ヒルゲンドルフは『種の起源』を感動して読み、博士論文でもそれを化石に応用したほどでしたから、ダーウィンの学説をよく知っていました。

この論文を読んだ大英博物館自然史部門が、生きているオキナエビスに大枚の報償金をつけました。三崎にある東京大学臨海実験所の採集人、熊さんが採集して、家も建つほどの大金を得ました。このことから「長者貝」の別名がついたそうです。

### 江ノ島や芦ノ湖での目を見はる採集活動

ヒルゲンドルフは採集にはとても熱心でした。江ノ島沖の採集では、途中で暴風に出会い、船頭たちは直ちに引き返そうとしましたが、ヒルゲンドルフは採集が大事であると船頭たちを説得し、みごとにホッスガイ(ガラスカイメン)を入手できたこともあったといえます。この時に採集したクーマ類やカイミジンコなどはベルリンに持ち帰られ、それぞれ専門家が研究をして報告しました。

また、ヒルゲンドルフが箱根芦ノ湖で採集し

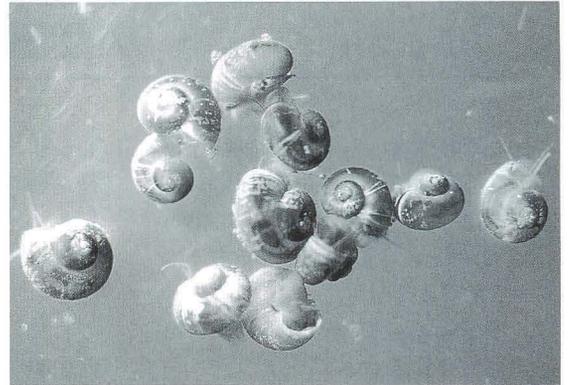


写真6. ニホンミズシタダミ、石原龍男氏蔵。

た、たった1個の試料に基づいて記載されたニホンミズシタダミ(巻き貝の仲間)は、その後、日本の研究者が何度採集を試みても発見されませんでした。絶滅したのだろうか、あるいは、他の場所で採集されたものだろうかと考えられていました。1971年にようやく、芦ノ湖でその生息が確認されました。その後、1981年と1982年にも生息が確認されていますが、レッドデータブックでは希少種となっています。

### 日本の魚学・水産学への貢献

ヒルゲンドルフはドイツへ帰ると、ベルリンの自然史博物館で魚類学の研究をし、日本の魚類学に大きく貢献しました。ヒルゲンドルフの教えは、弟子松原新之助を通じて、日本の魚学、水産学に脈々と流れています。松原新之助は、東京水産大学の前身である水産伝習所や水産講習所の設立に努力し、また、実業界では大日本水産会の設立に献身しました。

### 展覧会へおいで下さい

多くの人々の心暖まるご協力をえて、現在、ヒルゲンドルフのコレクションは日本に里帰りしています。来年2月1日からは、神奈川県立生命の星・地球博物館で、「日本の魚学・水産学事始め—フランツ・ヒルゲンドルフ展—」として展示されます。展覧会の標本から、先人の苦勞が偲ばれることでしょう。

最後に、私は、ウミホテルの模式標本を1996年夏、ようやく目にするのができたことを記しておきたいと思います。ウミホテルの産地については、長い間、日本のどこかわからないままでしたが、標本台帳から、江ノ島であることがわかりました。

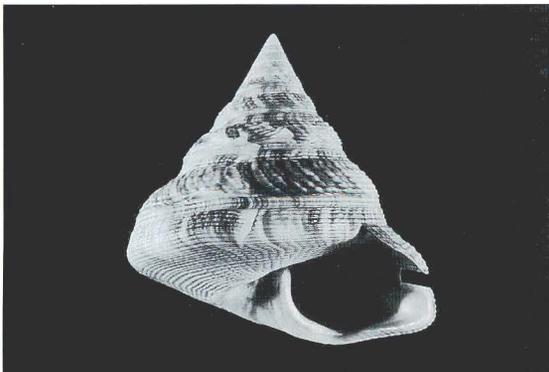


写真5. オキナエビス、佐々木猛智氏蔵。